

学校とは ②登校

「学校とは」どんな存在かと問われると、私は「小さな社会」と答えます。学級・学校を「社会」にして、そこに集う子供たちが、道徳的な価値観を出し合いながら、自分で目標やめあてを決めて自分の生活改善をしたり、みんなで話し合ってみんなで決めたことを実践しながらよりよい学級・学校生活創りをしたりしていくのです。

そこには社会と同じようにルールがあったり、みんなで協力する場面があったりします。この「小さな社会」をいかに、本当の社会に繋げていくのが大切です。そこで、「小さな社会」では、知識を学ぶことはもちろん、「もっとわくわく通信178号」でも書いたように、山と同様に心身を鍛え、自らを成長させていくことにも重きを置きます。子供たちは、多様な価値観を出し合い、折り合いをつけながら決めていく過程で、人間関係も同時に築いていきます。この「小さな社会」では、時にはトラブルや壁に出会い、問題解決をしながら「知・徳・体」という将来にわたって必要な力を鍛えているのです。

そこで、この「小さな社会」に責任をもって送り出すことが保護者に求められます。だからこそ、法律でも保護者に、小・中学校9年間の普通教育を受けさせる義務（就学義務）が定められているのです。「小さな社会」の意義を我が子に伝えることが保護者の務めであると同時に「覚悟」とも言えるのです。

しかし、時代と共にこの「小さな社会」への「登校」そのものにストレスを感じ、「小さな社会」から足が遠くの子供たちも増えてきていることは周知の事実です。保護者が躍起になってこのストレスをとり除くことに重きをおくことよりも、子供の気持ちにしっかりと寄り添いつつも、子供の情報だけに流されず、「鍛える場」へ誘（いざな）うことに重きを置いて欲しいと思います。それができるのは、我が子の成長を願い、教育を受けさせる義務を負う保護者だけがもつ、「愛情」とも言えるのです。



これからの時代は、「小さな社会」をよりよいものにするためには、学校と家庭・地域が連携する必要があります。そして、この「小さな社会」から、将来本当の社会に巣立っていく子供を、胸を張って送り出せるようにしていきたいと思っています。【まだまだ続く】

テレビ局の体験教室

今日14日(金)は、KKTの協力を得て、5年生が社会科で、「情報を伝える人々とわたしたち」の授業を行いました。これまで5年生の子供たちは、「放送局の人々は、多くの人に情報を伝える上で、どのような取り組みをしているのだろう」という学習をしてきました。そこで今回は、本当のテレビ局の人々を招いて、授業の中で、番組作りのための様々な仕事について教えていただいたのです。子供たちは、仮の番組の中で、中継された校長室の様子を興味津々で観たり、テレビ番組を支える人々の役割を知ったりと、本物にふれることで、理解を深めることができたようです。

今日の授業の様子は、読売新聞の取材も受け、KKTホームページでも紹介されるそうです。

